

第6回目第5章 (p.107~120) 共同体 (コミュニティ) と弟子道 (ディサイプルシップ)

2014年9月13日(土)

再洗礼派の伝統はポスト・クリスダムにいかなる見解を提示できるか。

第五の中核概念

教会が召されているのは、弟子道と宣教、交わりの場、相互の責任と義務、それに多数の声 (マルチボイス) による礼拝を捧げる、献身的な共同体であるためです。私たちは共に食事をし、パンと杯を分かち合い、一緒に神の国を求めつつ、希望を持ち続けます。私たちはそのような教会形成を促進することに献身し、そこでは若者も年配者も尊重され、協調姿勢のリーダーシップ、役割が男女別ではなく賜物によること、そして信仰者のための洗礼を必要とします。

ポスト・クリスダムの時代にあつて、「教会が現代にどんな意味を持っているのか」という問いにいかに答えるか。

◎模索する教会

* 「エマージング・チャーチ」に注目したり、危惧を抱いたり。新しい教会に確信を持ったり、まだ先はわからないと思ったり。宣教に意欲的だったり、礼拝や共同体の本来の姿を模索したり。シンプルな教会 (持続可能かつ再生可能なクリスチャン共同体) を追及したり。

* 熱心に、または仕方なく旧来型の教会に参加する人々。イングランドの中でもそういった教会が盛況を呈したりしている。こういった教会の問題点 (クリスダム世代の最後の世代に仕えているのか。確実性と安定性を求める人たちの単なる避難所? さらに発展を遂げることができるのか)

* 旧来型教会と新興型教会が互いに受け入れあつて、宣教に向けてのエキュメニズムを築く必要あり。

エマージング・チャーチ (新興教会) 運動

今日のエマージング・チャーチと初期アナバプティズムの類似点

- * 社会的、政治的、経済的、文化的、宗教的混乱期。
- * 単一の運動ではなく、各地の先駆者たちが同じ情熱を抱く仲間を発見するようになった。
- * 当時の新興の技術 (16世紀は印刷術、今ならインターネット) を利用。
- * 旧来型教会が社会を変革するには無力だと失望していた。
- * 教会規律の制限を受けない自由で斬新なモデルと教会生活様式を探求。
- * パフォーマンス志向の精神を拒絶、マルチボイスによる教会のあり方を奨励。
- * 弟子道と相互責任 (アカウントビリティ) を強調——新種の修道士
- * 心髄において宣教運動。教会の新しいあり方、個人と社会の変革に関心あり。

*クリスンダム型教会スタイルに対して、斬新な教会のあり方を提唱。

◎アナバプティズムは、エマージング・チャーチにとって励ましとなりうるものを持っている。

(1) 特有の歴史的な参照点を提供できる。(アナバプテストたちはすでに、クリスンダムの諸教会に歴史的にずっと抵抗してきたのだから)

(2) 初期のアナバプテストの関心事——おろそかにされてきた聖書的な行いの回復(そのためには社会的制裁もいとわず)。

◎旧来型教会にとっては「進化」と呼ぶべきか。旧来型教会もエマージング・チャーチも相互に学び合うことが不可欠。再洗礼派の伝統への共通の関心が、意思疎通に役立つかも。

弟子道と宣教の共同体

◎宣教について

*「教会」は弟子道と宣教に献身する共同体—— この主張は今日では当たり前と受け取られるかもしれないが、再洗礼派は16世紀にこれを提唱して、罵倒され迫害された。

*クリスンダムの教会——「教会に通う」という意識

・教会とは聖なる建築物

・一定の期間ごとに足を運び、プロの聖職者たちが企画したイベントに観衆として参加。

・制度としての教会。人生で必要な儀式を提供するところ。

・人口のほとんどがクリスチャンである(形だけにせよ)という所では、宣教の必要を感じない。また、宣教の必要な場所に対する責任は国家と宗教的専門家による組織が負っていた。

*クリスンダムの教会の負の遺産——「宣教」と「共同体」の断絶

・多くのクリスチャンにとって、「宣教」とは特別に立てられた人たちによる活動であり、自分たちの地域外で必要とされるもの。

・再洗礼派にとって、クリスンダムは本物のクリスチャンではない。回心の必要あり。

・大宣教命令(マタイ28:18~20)は再洗礼派にとって宣教の原動力。

◎弟子道について

*弟子道は一般のクリスチャンのものではなかった。再洗礼派は、イエスに従うすべての人に皆が主の弟子となるように呼びかけた。

*宗教改革者にとっての恵み——キリストの働きによって罪人が義とされること

再洗礼派にとっての恵み——義とされた人たちの内に働く神の変革の力。予定説の教義を退け、行いのない信仰を拒んだ。再洗礼派の教会——弟子として献身した人々のみ。本人の意思に根ざす選択、弟子としての召命の自覚・・・結果的に迫害された。

*再洗礼派の教会・・・弟子道と宣教の両方を献身の中核とする。弟子道をクリスチャン個人の選択の自由とは考えない。(クリスチャンが現実にも求めているもの——束縛されず、信仰や特定の行為を強要されず、温かく歓迎してくれる教会。彼らの緩やかで穏や

かな変化を是認するが、弟子道を個人の自由選択に任せるのではない)

アナバプテストの教会をどのように分類するか。

共同体に見られる4つのタイプ (ポール・ヒーバートによる分類)

- ①境界が定められた (bounded)
- ②不明瞭な(fuzzy)
- ③開放的な(open)
- ④中心に向かう centered)

歴史的には「境界限定」型を採り入れ、強固な境界線を維持し、境界内と外を明白に区別。現在では、「中心志向」型の方がピッタリくると考えている。内と外との区別ではなく、人々が歩みを進める方向性を重視。内には明確な中核信念がありながら、外に対しては常に開かれている。